

研究業績等に関する事項

| 著書、学術論文等の名称 | 単著、 共著の別 | 発行又は 発表の年月 | 発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称 | 概 要 |
|---|------------------------|--|---------------------------------------|--|
| (著書(欧文)) 1. | | | | |
| (著書(和文)) 1. 騎手コンディショニングバイブル 2. 保育の道をめざす人へのアドバイス (改訂版) 3. たのしく学べる乳幼児のこころと発達 | 共著 共著 共著 | 2011年12月 2016年8月 2021年1月 | 財団法人 競馬共助会 株式会社みらい 福村出版 | 日本中央競馬会所属騎手及び競馬学校生徒、そして厩舎関係者を対象とした体のコンディショニングに関する研究成果をまとめた本を作成・執筆した。 第2章「騎手の身体的特性2)」(p. 24-27)、第4章「騎手の傷害予防」(p. 90-117)を担当。 (分担執筆：阿江通良、中川昭、松元剛、麻見直美、福田崇、武田哲子、 <u>森慎太郎</u>) 保育士をめざす学生が知っておくべき知識や心構えについてまとめた本を執筆した。 第6章「子どもと一緒に運動遊び」(p. 119-140)を担当。 (分担執筆：紙透雅子、酒巻洋一、木村由希、大内晶子、鈴木範之、前嶋元、 <u>森慎太郎</u>) 乳幼児心理学のテキスト(入門書)として、近年目覚しく研究が進む心理学の最新の知見を活かしながらも、基礎・基本を初心者にわかりやすく解説し、公認心理師試験にも対応している。(総ページ数328ページ) 第3章「からだと運動」(pp. 41-56)の執筆を担当。(分担執筆：櫻井茂男・大内晶子(編)。共著者：櫻井茂男・田中美帆・ <u>森慎太郎</u> ・大塚由美子・仲渡江美・中道圭人・桑原千明・佐藤鮎美・平井美佳・田中浩司・大内晶子・大島みずき・櫻井登世子・佐藤広英・新川貴紀) |

| | | | | |
|---|-----------|-----------------|--|--|
| <p>(学術論文(欧文))</p> <p>1. Diffusion property differences of the lower leg musculature between athletes and non-athletes using 1.5T MRI. (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2012年8月</p> | <p>Magnetic Resonance Materials in Physics, Biology and Medicine, 25(4):p. 277-284</p> | <p>拡散テンソル画像を用い、筋を描出することができる。日常運動を行っているアスリートと行っていない非アスリートにおいて筋の構造は異なっていることが考えられる。そのため、これらの違いを拡散テンソル画像を用いてDiffusion Property(Fractional anisotropy [FA], Three eigenvalues [λ], Apparent diffusion coefficient [ADC])の差異を比較検討することを目的として研究を行った。本研究よりアスリートは非アスリートよりADC, λが低いことが明らかとなった。 (Okamoto Y, <u>Mori S</u>, Kujiraoka Y, Nasu K, Hirano Y, Minami M) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |
| <p>2. Epidemiology of Collegiate American Football Injuries -Longitudinal Injury Surveillance for 10 Years, 1999 Through 2008- (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2012年10月</p> | <p>Football Science Vol9, 70-78</p> | <p>アメリカンフットボールにおける日本の大学チームの10年間に渡る傷害調査のデータから、傷害発生の特徴を明らかにするために検討を行った。 (Takashi Fukuda, Shumpei Miyakawa, Tsuyoshi Matsumoto, Akito Kawasaki, Masahiro Takemura, <u>Shintaro Mori</u>) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |
| <p>3. Effects of Cold Stimulation on Mitochondrial Activity and VEGF Expression in vitro (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2016年2月</p> | <p>Int J Sports Med 2016; 37: 1-12</p> | <p>様々な温度による冷却刺激がミトコンドリア活性とVEGF発現に及ぼす影響について明らかにすることを目的として研究を行った。一定の温度による冷却刺激を与えることで、ミトコンドリア活性とVEGFの発現が促進された。 (T. Sugasawa, N. Mukai, K. Tamura, T. Tamba, <u>S. Mori</u>, Y. Miyashiro, M. Yamaguchi, S. Nissato, S.-G. Ra, Y. Yoshida, M. Hoshino, H. Ohmori, Y. Kawakami, K. Takekoshi) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |

| | | | | |
|--|-----------|-----------------|--|--|
| <p>4. Effect of closed fracture on spot urinary thiobarbituric acid reactive substance level in old rats (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2017年2月</p> | <p>Gazzetta Medica Italiana Archivio per le Scienze Mediche 2017 January-February;176(1-2):16-21</p> | <p>ラットの第五中足骨骨折モデルを用いて、骨折によってTBARSが増加するかを分析した。骨折によって生体内の酸化ストレスが増加したことが明らかとなった。 (Takehito SUGASAWA, Naoki MUKAI, Kyoko TAMURA, Taiko TAMBA, <u>Shintaro MORI</u>, Yuki MIYASHIRO, Mami YAMAGUCHI, Norihiko MORIYAMA, Sumiko NISSATO, Song-Gyu RA, Yasuko YOSHIDA, Yasushi KAWAKAMI, Kazuhiro TAKEKOSHI) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |
| <p>5. Changes in skeletal muscle diffusion parameters owing to intramyocellular lipid. (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2020年11月</p> | <p>Magnetic Resonance Imaging Volume 73, November 2020, Pages 70-75</p> | <p>骨格筋細胞内脂肪が骨格筋細胞の水分子の拡散制限因子であるかを検討するため、骨格筋細胞内脂肪と拡散パラメータの相関を評価した結果、骨格筋細胞内脂肪が拡散パラメータに影響を与えることが示唆された。 (Kiichi Tadano, Yoshikazu Okamoto, Tomonori Isobe, <u>Shintaro Mori</u>, Hiroaki Suzuki, Manabu Minami, Takeji Sakae) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |
| <p>(学術論文(和文)) 1. 高校野球選手においてメディカルチェックから投球肩障害の発症を予測できるか？ (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2010年8月</p> | <p>日本臨床スポーツ医学会誌18巻3号</p> | <p>高校野球チームにおける投球肩障害の発症に関与する危険因子を同定するため、メディカルチェックを行い、7カ月後に発症調査を実施し、ロジスティック回帰分析を行った。発症に有意に関連する因子は肩痛の既往歴、SLRの左右差、肩関節外旋可動域の左右差であった。 (石井 壮郎、森 慎太郎、向井 直樹、宮川 俊平) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |
| <p>(紀要論文) 1. 本学に於ける新入生オリエンテーションの実施方法 -その変遷と今後の展望- (査読付)</p> | <p>共著</p> | <p>2013年3月</p> | <p>常磐短期大学研究紀要 第41号</p> | <p>常磐短期大学で行われる新入生オリエンテーションについて、その変遷から何が求められているのかを整理し、課題を明らかにして、今後の新入生オリエンテーションのあるべき姿について考察した。 (紙透 雅子、森 慎太郎) (共同研究のため担当部分抽出不可能)</p> |

| | | | | |
|--|----|---------|-------------------|---|
| 2. 骨格筋の評価における拡散パラメータの有用性 (査読付) | 単著 | 2015年3月 | 常磐短期大学研究紀要 第43号 | 拡散テンソル画像は様々な組織の異方性構造特性を非侵襲的にみることができる。微細な損傷である運動誘発性筋損傷による筋組織の変化を拡散パラメータを用いて評価した。Fractional anisotropyは運動負荷後において低下を示し、Apparent diffusion coefficientは上昇を示した。 |
| 3. 幼児期の生活環境がその後の体力・運動能力に及ぼす影響 (査読付) | 単著 | 2017年3月 | 常磐短期大学研究紀要 第45号 | 幼児期の生活環境が将来の体力・運動能力に与える影響を検討した。その結果、幼児期の生活環境と18歳時の体力・運動能力と関連がある可能性が示唆され、その要因は幼児期に「運動遊びが好き」であったかどうかであることが明らかとなった。 |
| 4. 短大生の体力と幼児期及び児童期における生活環境との関連性 (査読付) | 単著 | 2018年3月 | 常磐短期大学研究紀要 第46号 | 短大生の体力が幼児期及び児童期の生活環境に関連しているか検討し、その関連要因について明らかにすることを目的とした。その結果、幼児期及び児童期の運動に対する意識や生活環境とその後の短大生時の体力・運動能力に関連がある可能性が示唆され、その要因は幼児期及び児童期に運動遊びが好きであったかどうか、そして運動遊びを好んで行っていたかどうかであることが明らかとなった。 |
| 5. 教員・保育者が行うリスクマネジメント (査読付) | 単著 | 2018年3月 | 常磐短期大学研究紀要 第46号 | 事故や災害はいつどこで発生するかは分からないが、科学的、経験的にしっかりと分析をし、対策を講ずれば被害を防いだり、最小限に留めたりすることが可能である。子供を守る立場である教員及び保育者は、子供に迫る危機に対してどのように対処するのか、もしくは危機をどのように把握し、排除するのか、という危機管理能力が必要である。そのため、教員・保育者が学校・保育現場で行うべきリスクマネジメントについて、その考え方や方法をまとめた。 |
| (辞書・翻訳書等) 1. | | | | |
| (報告書・会報等) 1. 騎手のフィジカルトレーニングおよびコンディショニングに関する研究 (査読付) | 共著 | 2014年1月 | 日本臨床スポーツ医学会誌22巻1号 | 日本中央競馬会所属騎手に対し、フィジカルトレーニングやコンディショニングに関して、質問紙法による現状調査を行ったものを資料として報告した。 (松元 剛、春山 圭佑、福田 崇、森 慎太郎、宮川 俊平) (共同研究のため担当部分抽出不可能) |

| | | | | |
|--|-----------|-----------------|---|---|
| <p>(国際学会発表)</p> <p>1. Comparison of Diffusion Property Differences of the Calf Muscles between Athletes and Non-athletes.</p> | <p>共著</p> | <p>2009年5月</p> | <p>International Skeletal Society 2009 at Washington DC</p> | <p>拡散テンソル画像を用い、筋を描出することができる。日常運動を行っているアスリートと行っていない非アスリートにおいて筋の構造は異なっていることが考えられる。そのため、これらの違いを拡散テンソル画像を用いて、Fractional anisotropyの差異を比較検討することを目的として研究を行った。本研究より、アスリートは非アスリートよりFractional anisotropyが高いことが示唆された。 (Yoshikazu Okamoto, Akira Kunitatsu, <u>Shintaro Mori</u>, Toru Okamoto, Tetsuo Inoguchi, Manabu Minami)</p> |
| <p>2. Comparison of Diffusion Property Differences of the Calf Muscles between Athletes and Non-athletes.</p> | <p>共著</p> | <p>2010年5月</p> | <p>International Society for Magnetic Resonance in Medicine (ISMRM) 18th Scientific Meeting & Exhibition. (Stockholm)</p> | <p>拡散テンソル画像を用い、筋を描出することができる。日常運動を行っているアスリートと行っていない非アスリートにおいて筋の構造は異なっていることが考えられる。そのため、これらの違いを拡散テンソル画像を用いて、Fractional anisotropyの差異を比較検討することを目的として研究を行った。本研究より、アスリートは非アスリートよりFractional anisotropyが高いことが示唆された。 (Yoshikazu Okamoto, Akira Kunitatsu, <u>Shintaro Mori</u>, Toru Okamoto, Tetsuo Inoguchi, Manabu Minami)</p> |
| <p>3. Evaluation of the Change of Intramyocellular Lipid Metabolism due to Long-term Skeletal Muscle Training of the Calf by 3T H-MR Spectroscopy.</p> | <p>共著</p> | <p>2010年12月</p> | <p>The Radiological Society of North America (RSNA) 96th Scientific Assembly and Annual Meeting (Chicago)</p> | <p>下腿骨格筋トレーニングによって拡散固有値及び細胞内脂肪を測定し、骨格筋の微小構造と代謝の変化を検討した。 トレーニングによって筋力は増大し、細胞内脂肪は減少したが、拡散固有値は有意な変化は認められなかった。 (Yoshikazu Okamoto, Tomonori Isobe, Yuji Hirano, <u>Shintaro Mori</u>, Kiichi Tadano, Minami Manabu)</p> |
| <p>(国内学会発表)</p> <p>1. クライオストレッチングが筋の疲労回復に及ぼす影響</p> | <p>共著</p> | <p>2005年9月</p> | <p>第60回日本体力医学会大会 (岡山)</p> | <p>クライオストレッチングはアイシングとストレッチングを組み合わせた方法である。このクライオストレッチングがコンディショニングの一手段として、筋の疲労回復にどのような効果があるのかを検討することを目的として研究を行った。下腿を運動負荷によって疲労させ、その後安静・アイシング・ストレッチング・クライオストレッチングの処置をそれぞれ行い、筋硬度、足関節可動域を測定した。各処置間の差は認められなかった。 (森 慎太郎、向井 直樹、白木 仁、竹村 雅弘、福田 崇、宮川 俊平)</p> |

| | | | | |
|--|----|---------|----------------------|--|
| 2. クライオストレッチングが筋の疲労回復に及ぼす影響 (第2報) | 共著 | 2008年9月 | 第63回日本体力医学会大会 (大分) | <p>前回の報告では、アイシングの時間を20分間として処置を行ったが、その効果は認められなかった。そこで本研究では、アイシングの時間を10分間とし、また測定項目に最大等尺性筋力と筋活動を追加し実験を行った。各処置間に差は認められなかったが、アイシング単独の処置を行うよりも、疲労した筋の筋硬度を減少させる傾向が認められた。</p> <p>(森 慎太郎、向井 直樹、白木 仁、竹村 雅弘、宮川 俊平)</p> |
| 3. 剣道における床面の違いが面打ち時の下腿筋活動に及ぼす影響 | 共著 | 2008年9月 | 第63回日本体力医学会大会 (大分) | <p>剣道が行われる施設はニスで塗装された床面と塗装されていない床面がある。この床面の違いにより滑りやすさが違うため、これらの違いが剣道における下腿の筋活動に及ぼす影響を明らかにすることを目的として研究を行った。本研究の結果より滑る床面においてヒラメ筋の筋活動が高いことが示された。</p> <p>(後藤 千晶、森 慎太郎、向井 直樹、白木 仁、竹村 雅弘、宮川 俊平)</p> |
| 4. 大学剣道選手におけるアキレス腱の形態的特性 | 共著 | 2008年9月 | 第63回日本体力医学会大会 (大分) | <p>剣道は左脚を後ろにして構え、瞬発的に前方に蹴り出す動作を繰り返す競技特性から、左脚アキレス腱に大きな負荷がかかると考えられる。そこで剣道選手のアキレス腱の特性を調査することを目的とし研究を行った。一般人と比較し、下腿三頭筋は発達しているが、アキレス腱の横断面積は差がないという結果より、アキレス腱の一定面積あたりにかかるストレスが増大するため、アキレス腱障害が多い要因の一つとなっている可能性が示唆された。</p> <p>(廣野 準一、向井 直樹、森 慎太郎、白木 仁、竹村 雅弘、宮川 俊平)</p> |
| 5. アスリートと非アスリートによる下腿骨格筋Fractional anisotropyの差異の検討 | 共著 | 2008年9月 | 第36回日本磁気共鳴医学会大会 (旭川) | <p>拡散テンソル画像を用い、筋を描出することができる。日常運動を行っているアスリートと行っていない非アスリートにおいて筋の構造は異なっていることが考えられる。そのため、これらの違いを拡散テンソル画像を用いて、Fractional anisotropyの差異を比較検討することを目的として研究を行った。本研究より、アスリートは非アスリートよりFractional anisotropyが高いことが示唆された。</p> <p>(岡本 嘉一、國松 聡、森 慎太郎、鯨岡 結賀、新津 守、南 学)</p> |

| | | | | |
|---|----|----------|--------------------------|---|
| 6. 3.0T MRIを用いた下腿筋 ¹ H-MRSのデータ取得条件の検討 | 共著 | 2010年4月 | 日本放射線技術学会第66回総会学術大会（神奈川） | ¹ H-MRSは従来中枢神経系で主に頭蓋内疾患の診断に使われてきたが近年、筋など適応部位が広がってきている。この筋の ¹ H-MRSのデータ取得に関し、最適な条件を得るため、被験者や撮像の条件を変え、比較検討を行った。 （磯辺 智範、平野 雄二、只野 喜一、森 慎太郎、宮田 真理子、山田 功二、岡本 嘉一） |
| 7. Proton MRSによる下腿筋代謝解析のための至適撮像パラメータの検討 | 共著 | 2010年7月 | 第26回放射線技師総合学術大会（東京） | Proton MRSにおいて下腿筋代謝解析に関し、最適な撮像条件を得るため、撮像パラメータを変え、比較検討を行った。 （只野 喜一、磯辺 智範、平野 雄二、森 慎太郎、新藤 雅司、宮田 真理子、山田 功二、佐藤 英介、岡本 嘉一） |
| 8. 騎手の形態的特性-競馬学校生徒と比較して- | 共著 | 2010年9月 | 日本体育学会第61回大会（愛知） | 騎手の形態的特性を明らかにするため、騎乗に重要だと思われる部位（上腕部、上背部、体幹部、殿部、大腿部）の筋の筋断面積をMRIを用いて撮像・計測し、騎手と競馬学校生徒で比較した。騎手は広背筋、上腕三頭筋が発達していることが明らかになった。 （森 慎太郎、松元 剛、中川 昭、阿江 通良） |
| 9. 騎手における腰痛の有病率とその発生要因 | 共著 | 2010年9月 | 第65回日本体力医学会大会（千葉） | 騎手の腰痛に関する実態を調査し、またメディカルチェックによるデータとその後1年間の腰痛発症調査の結果をもとにロジスティック回帰分析を用いてその関連を検討した。騎手の腰痛の有病率は47.0%であり、足関節背屈角度の左右差が腰痛の発生要因として挙げられた。 （森 慎太郎、石井 壮郎、松元 剛、福田 崇、阿江 通良、向井 直樹、宮川 俊平） |
| 10. MRI拡散テンソルおよびMR spectroscopy同時撮影による運動効果判定、運動療法効果判定への試み | 共著 | 2010年11月 | 第21回臨床スポーツ医学会学術集会（茨城） | 下腿骨格筋トレーニングによって拡散固有値及び細胞内脂肪を測定し、骨格筋の微小構造と代謝の変化を検討した。 トレーニングによって筋力は増大し、細胞内脂肪は減少したが、拡散固有値は有意な変化は認められなかった。 （岡本 嘉一、森 慎太郎） |

| | | | | |
|---|----|----------|--------------------------|---|
| 11. 運動誘発性筋損傷後の拡散テンソル画像 | 共著 | 2011年9月 | 第66回日本体力医学会大会（山口） | <p>拡散テンソル画像は様々な組織の異方性構造特性を非侵襲的にみることができる。微細な損傷である運動誘発性筋損傷による筋組織の変化を拡散テンソル画像を用いて評価した。Fractional anisotropyは運動負荷後において低下を示し、Three eigenvalues、Apparent diffusion coefficientは上昇を示した。 （森 慎太郎、岡本 嘉一、磯辺 智範、平野 雄二、篠田 和哉、加藤 雄一、向井 直樹、宮川 俊平）</p> |
| 12. 種々の骨格筋におけるFA値のstandard value | 共著 | 2011年9月 | 第39回日本磁気共鳴医学会大会（福岡） | <p>拡散テンソル画像はこれまで主に脳白質神経線維の描出に用いられてきたが、最近骨格筋の微細な構造変化を反映しうる評価ツールとして注目されている。そこで種々の骨格筋におけるFractional anisotropy (FA) 値のstandard valueを把握するため、撮像を行った。 （磯辺 智範、岡本 嘉一、平野 雄二、森 慎太郎、佐藤 英介、篠田 和哉、加藤 雄一）</p> |
| 13. スロートレーニングが局所の骨格筋脂肪代謝に与える影響の検討 | 共著 | 2011年11月 | 第22回日本臨床スポーツ医学会学術集会（青森） | <p>スロートレーニングを3カ月行い、局所の骨格筋脂質代謝にどのように作用するのかをH1-MR spectroscopyを用いて検証した。スロートレーニングによって霜降り状の脂肪である細胞外脂肪は変化がなく、インスリン抵抗性と関連性の高い細胞内脂肪は低下し、トレーニングの有用な効能のひとつと考えられた。 （岡本 嘉一、森 慎太郎）</p> |
| 14. 大学野球選手に対する外傷・障害調査～痛みの出方、強さに注目して～ | 共著 | 2012年9月 | 第67回日本体力医学会大会（岐阜） | <p>大学野球選手に対し、アンケートによる外傷・障害調査を行った。有痛者は競技動作時痛を抱えている選手が多く、痛みの強さに関しては、競技動作に支障はないと答える選手が多かった。 （谷口 直弘、廣野 準一、森 慎太郎、向井 直樹）</p> |
| 15. 陸上競技中・長距離競技者に対する障害と関連したコンディショニングチェック項目の検討 | 共著 | 2012年11月 | 第23回日本臨床スポーツ医学会学術集会（神奈川） | <p>陸上中・長距離競技者に対し、簡便なコンディショニングチェックを行い、現在体幹もしくは下肢に痛みを有する者とそうでない者を比較検討した。有痛群では、片脚立位骨盤側方偏位が多き事が分かった。 （大桃 結花、森 慎太郎、廣野 準一、向井 直樹）</p> |

| | | | | |
|--|----|----------|--------------------------|--|
| 16. 運動誘発性筋損傷による拡散パラメータの変化 | 共著 | 2013年6月 | 第2回日本アスレティックトレーニング学会学術集会 | 拡散テンソル画像は様々な組織の異方性構造特性を非侵襲的にみることができる。微細な損傷である運動誘発性筋損傷による筋組織の変化を拡散テンソル画像を用いて評価した。Fractional anisotropyは運動負荷後において低下を示し、Three eigenvalues、Apparent diffusion coefficientは上昇を示した。 (森 慎太郎、向井 直樹、竹村 雅裕、宮川 俊平) |
| 17. 異なる温度刺激が細胞内の代謝活性に及ぼす影響 ーヒト脂肪肉腫細胞を用いた細胞生物学的解析ー | 共著 | 2014年5月 | 第63回日本理学療法学会 | 細胞のエネルギー産生に重要である酸化還元反応に着目し、ヒト培養細胞における異なる温度刺激が細胞の代謝活性に及ぼす影響を検討した。脂肪肉腫細胞に対して、25℃の冷却刺激は代謝活性を増加させる事が示唆された。 (菅澤 威仁、向井 直樹、森 慎太郎、半田 貴志、熊木 優子、田村 京子、丹波 泰子、大城 聡) |
| 18. 異なる温度刺激が細胞の代謝活性に及ぼす影響 ーヒト横紋筋肉腫細胞を用いた細胞生物学的解析ー | 共著 | 2014年5月 | 第63回日本理学療法学会 | ヒト培養細胞のエネルギー産生に重要である酸化還元反応に着目し、ヒト培養細胞における異なる温度刺激が細胞の代謝活性に及ぼす影響を検討した。横紋筋肉腫細胞に対して施行される様々な温度刺激は、各温度において細胞の代謝活性に与える影響が異なる事が示唆された。 (菅澤 威仁、向井 直樹、森 慎太郎、半田 貴志、熊木 優子、田村 京子、丹波 泰子、大城 聡) |
| 19. 大学生女子ラクロス選手におけるコンディショニングの変動と疼痛発生との関連 | 共著 | 2015年11月 | 第165回日本体力医学会関東地方会（東京） | 女子ラクロス選手の疼痛発生と主観的なコンディショニングに関連があるか検討した。疼痛発生の関連因子として「疲労感」が抽出され、疲労感が低いと疼痛発生率が低下していた。 (宮代 祐希、菅澤 威仁、森 慎太郎、山口 真未、向井 直樹) |
| 20. ジュニア層の七種競技者における傷害調査 | 共著 | 2015年11月 | 第165回日本体力医学会関東地方会（東京） | ジュニア層の七種競技者の傷害発生率とコンディショニングを調査し、その関連について検討した。傷害発生の関連因子として「パフォーマンス達成度」と「疲労感」が抽出された。 (山口 真未、菅澤 威仁、森 慎太郎、宮代 祐希、向井 直樹) |

| | | | | |
|------------------------------------|----|----------|-------------------------|---|
| 21. 野球の投球が等速性筋力に与える影響 | 共著 | 2017年9月 | 第72回日本体力医学会大会（愛媛） | 野球の投球が肩関節の等速性筋力に与える影響を明らかにするために、100球の全力投球前後の等速性筋力を測定した。その結果、野球選手において繰り返される投球は肩関節外旋最大仕事量を低下させることが示唆された。 （市田 慧治、森 慎太郎、河村 崇史、向井 直樹） |
| 22. 中高一貫校に設置されたトレーナールーム利用者の外傷・障害報告 | 共著 | 2017年11月 | 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京） | 学校生徒を対象として外傷・障害の相談やリハビリ指導などを行っているトレーナールームの2014-2016年度の3年間の利用者の情報を集計し、学校現場における生徒の外傷・障害の実態を報告した。 （森 慎太郎、奥脇 透） |
| (演奏会・展覧会等) 1. | | | | |
| (招待講演・基調講演) 1. | | | | |
| (受賞(学術賞等)) 1. | | | | |

研究活動項目

| 助成を受けた研究等の名称 | 代表, 分担等の別 | 種類 | 採択年度 | 交付・受入元 | 交付・受入額 | 概要 |
|---|-----------|----|--------|--------|---------|--|
| (科学研究費採択) 1. | | | | | | |
| (競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1. | | | | | | |
| (共同研究・受託研究受入れ) 1. | | | | | | |
| (奨学・指定寄付金受入れ) 1. | | | | | | |
| (学内課題研究(共同研究)) 1. | | — | | — | | |
| (学内課題研究(各個研究)) 1. 新しい指標を用いた運動後のアイシングの有効性の検討 - 拡散パラメータを用いて- | — | — | 2013年度 | — | 400,000 | 運動によって引き起こされる微細な筋損傷について、その回復過程を、特に新しい評価指標である磁気共鳴画像(以下、MRI)を用いた拡散テンソル画像から得られるパラメータを観察することで、運動後に損傷部位を氷で冷やすアイシングを行った場合の効果を明らかにすることを目的として実験を行った。 |
| (知的財産(特許・実用新案等)) 1. | — | | | — | — | |